様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　５月３１日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：19520010
研究課題名（和文）　行為主体性と合理性の高レベル統合の研究

研究課題名（英文）　A Study of the High-level Integrity of Agency and Rationality

研究代表者
渡辺　邦夫（KUNIO WATANABE）
茨城大学・人文学部・教授
研究者番号：30191753

研究成果の概要（和文）：アリストテレス『自然学』『ニコマコス倫理学』およびプラトン初期対話篇を中心に、アリストテレス哲学とプラトン哲学における行為主体性と合理性の統合のさまを解釈として提出する研究。偶運論を通じた目的論の確立においてアリストテレスが自然と人為の連続の相のなかでの境界を設定できたこと、徳の倫理学の草創期においてプラトンとアリストテレスが、世俗と政治の世界の中の理性的な幸福戦略として徳の倫理を提唱できたことを、複数論文を通じてテキスト解釈として主張した。

研究成果の概要（英文）：A study of Aristotle's *Physics* and *Nicomachean Ethics* and of Plato's earlier dialogues which focuses on the high-level integrity of agency and rationality in the philosophies of Plato and Aristotle.　It is argued as an original interpretation of the texts both that Aristotle succeeded in establishing the distinction between art and nature through his analysis of the concept of chance and his teleology founded on this analysis and that Plato and Aristotle could claim the legacy of their virtue ethics as the most rational strategy to obtain happiness (*eudaimonia*) in this world of worldliness and political movements.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学
キーワード：西洋哲学

１．研究開始当初の背景

(1)アリストテレス目的論に関しては、プラトン哲学との差異を強調しすぎる科学主義的解釈と、古さと時代遅れを強調する解釈に二分されていた。プラトンをいかに受け継ぎ目的論として自然と人為の断絶面を発見したかということの穏当な解釈が必要であった。これは学問活動の実践としての意義を再確認することにより果たしうると思われた。

(2)プラトン哲学から出発した徳の倫理学の、現代における正当性に関して無理解な言説

が多かった。現代の心の哲学、とくにコネクショニズムにおける行為の原因としての感情の復権の意味を、行為の一般的説明において感情・欲求に適切な位置を与えていたプラトン・アリストテレスの時代にさかのぼって再把握する必要があった。

２．研究の目的

本研究はアリストテレス『自然学』を中心に、おもにアリストテレス哲学における行為主体性と合理性の統合の様子を解釈として提出する、3 年間の研究である。アリストテレス自然学がソクラテス・プラトン流の行為に根ざした哲学的思考の発展上に独自の改良を加えて学問として成り立った過程を、プラトン対話篇の側と、アリストテレス倫理学・自然学の側の両方の視角から捉えることを目的とする。

(1) ことにアリストテレスが一神教神学的な創造神の考え方からではなく、科学活動を人間の実践の視点から捉えたために、われわれが世界の現象を日常的・前理論的にいかなるディスポジションにおいて捉えていたかということを反省する視点を持ち、行為の世界の「目的」とは異なる「自然の目的」を捉えることができたと思われる。これを、偶運論と目的論をつなげることにより解釈として提出することを最大の目的とした。

(2) 同時にアリストテレスのこのような「行為の反省」としての哲学の始まりにも着目し、それはアリストテレス以前に行為の目的論的説明を本格的に創始したプラトン『ゴルギアス』等にみられる合理的態度であったということを示す。この点で、プラトン・アリストテレスは現代最新の心の哲学であるコネクショニズムの「行動の原因」の知見をいわば先取りするものであったことを示す。

(3) 最終的にはこの研究を通じて、科学的合理性そのものの隠れた意味を、捉え返すことが目的になる。

３．研究の方法

アリストテレスとプラトン双方のかなり幅広い範囲のテキストを扱う研究であり、このような視野の広い研究はわが国でも海外でもあまりおこなわれたことがない。以下のような方法を使用した。

(1) 専攻論文として、アリストテレス『自然学』、『ニコマコス倫理学』、プラトン初期対話篇などに関する解釈論文を発表して本計画の一つ一つの目的を達成する。

(2) Cambridge 大学 David Sedley 教授、UC Berkeley　Dorothea Frede 教授をはじめとする内外の有力研究者と意見交換をしてゆき、英語論文も執筆する。

４．研究成果

(1)『自然学』研究としては、計画当初すでに草稿ができていた「偶運の自然誌」と題する平成 19 年発表の紀要論文（業績⑦）において、偶運は、「目的的な見方」がわれわれの慣性的状態であるような日常的態度が、「裏をかかれる」事件のことであり、したがってこの偶運の存在から遡及して、深層で人間がコミットする「自然の目的」の存在を「推理する」議論がアリストテレスのテキストに存在する、と主張した。

① このような議論の存在は、アリストテレスが「創造主の頭の中の目的」に訴えることなしに「自然の目的」をみることができ、行為者の考える目的と体系的な区別を付けることができたがゆえに、自然と行為をカテゴリー的に区別することができたことを、ストレートに説明する。それと同時に、このような推理の存在は、アリストテレスを、科学主義の立場からも区別するのに役立つと思う。すなわち、自然の世界と行為の世界は、連続面と断続面の両面からみられるべきで、アリストテレスにおいては断続の発見は、人間の営みとしての認識活動と行為の、一定の連続性の基本了解を背景とし、その上でなされていた、というのがわたしの主張である。これらの事情は、自然と行為の区別が自明視される後の時代の事情とは異なる、重い意義を担っている。

② 同時にこのような議論は、ここで批判されるプラトンと批判するアリストテレス

が、行為の構造の理解においてはむしろ共通点、共有前提を多く持っていたことを示す。アリストテレスの理論的洞察とされていたものの多くは、かれの科学実践者としての鋭さに負っていたということも示される。すなわち、科学実践者として、自らが自然、とくに生物の諸現象の「ディスポジション」に対して、自身の「ディスポジション」を含み込んだ叙述をアリストテレスは志している。ゆえに、われわれの、あまりにノーマルであるが故に自分自身にさえ気づかれないコミットメントとして、「自然の目的」への荷担をかれは主張したと思われる。気づかれる目立つ現象である偶運は、目的への荷担の、逸脱した裏側からの証拠となっていた、と思われる。

③ 「偶運の自然誌」の改良英語版を作り、ケンブリッジ大学セドレー教授等の協力を仰ぎながら、最終確定版作成作業を続けている。現状における一定段階版を、本研究の旧来型研究成果報告書として印刷製本し、５０名以上の専門研究者に配布した冊子の中に、業績①として発表した。日本語「偶運の自然誌」にくらべ、より多くのテキストの解釈も含めるようにした。たとえば、降雨の「目的」に関するアリストテレスのコメントについて、気象学の将来の発展に向けてのコメントである旨詳細に解釈し、研究者のディスポジションと自然のディスポジションの「出会い」に関する『自然学』第２巻第８章のテキスト解釈を、中心的箇所の解釈にふさわしいように、充実した。

(2) 業績②と⑥が、アリストテレス以前のソクラテス・プラトンに関係し、③④⑤がアリストテレス倫理学の専攻論文である。

① 業績②および⑥では、倫理の学問的思考がまさに発生するとはどういうことであったのかということを、わたしの関心として保とうと思いながら解釈を組み立てた。そうした思考がしっかり立ち上がった後の人間にはもはや想像できない、現実の荒い試練の中で「理性的」であろうとすることの意味が、プラトンのいくつかの作品に、ありありと描かれているように思っている。これは、⑥ではソクラテスの判決前後のスピーチと獄中の脱獄可能性への対応の発言の分析から示され、②では目前の不正をなすことの誘惑とそれに訴える雄弁な弁論に対する反対弁論の分析で示される。同時にソクラテス・プラトンが言葉を使用する際の特段の教育的配慮にも注目した。この面から、いくつかの刺激的なせりふは、あげて読者への好刺激となることが計算済みであるような含みで理解すべきである、と論じた。

② 業績③、④、⑤を通じて、「自由」をなにより尊んだギリシアの哲学者らしく、アリストテレスがソクラテス・プラトンの「若者を大人扱いしながら、立派な自立した大人にするやり方」をよく継承して、そこに、かれの自然や心に関する理論的発見（この側面が本計画期間以前のわたしの主要業績の題材であった。業績⑧はこの側面に関するものになっている）を加えた、と考えている。業績③と⑤は友愛、愛に関する分析であり、行為の社会性と共同性の契機をアリストテレスの「合理性」「主体性」理解の根本として捉えた。友愛論において、アリストテレスは合理性と主体性の調和のとれた実現を

原理的出発点として選びつつ、現実の局面における両者の相克にも原理に基づく冷静な分析を加えている。この正義と愛の関係の問題という面を、とくに業績③で強調的に取り上げた。

③ 計画期間中にアリストテレスの「人柄の徳」の総論に関する業績④を書くことができたことが、計画全体の成否に関し、とくに重要であると考えている。アリストテレスは人間における感情が、場合により適切な行動を完全に不可能にし、場合により完全に促進するという重大な事実の認知を、ソクラテス・プラトン、あるいはギリシアの無名氏たちによって代々受け継がれてきた最良の教育的伝統から受け継ぎ、これに、かれの表現を与えた、とわたしは考える。これが往々にして評判の悪い『ニコマコス倫理学』第２巻第６章の「感情と行為におけるわれわれに対する中間」としての人柄の徳の定義の、実質的な意義であるとわたしは解釈した。このアリストテレスの洞察は、認知としての感情に関わる、最新のコネクショニズム研究につながる成果であった。じつはこの点の洞察はプラトンとソクラテスにおいても萌芽としてはみられるものであったと思われる。業績②に、その点を立証するための基本的材料をあげた。

(3) 現代哲学、現代社会における以上の解釈の意義を述べる。

① 上記(2)③から、われわれ人間のコントロールされた最良の行動が小さな頃からの地道な情緒面の微調整によって可能になるというかれらの発見は、「人間であることの意義」の認知につながっており、行為主体性をうむような「努力」が人間には可能であること、そのような可能性を知恵として取り入れて工夫することは、今日でもなお、知識人と一般市民いずれもがわきまえておいたほうがよいことであることを、わたしもアリストテレスなどギリシアのすぐれた哲学者とともに、主張したいと思っている。また、そのような感情と感情教育の重要性の論点は、現代最先端の認識に連なるものなのである。

② この点を代表に、古代ギリシア人が一個の個人のもちうる冷静な認識・自己認識のもとに最大限の行為主体性をもとうと企て、一部の重要な側面において現代のわれわれよりも豊かな自己認識を持っていたともいえるということを、８点すべての業績で論じた。

③ もとの計画における科学の合理性の再検討という課題も、本計画遂行途中で、このような、計画的に生きる人間の行為全体の意味の取り返しというより大きなテーマに接続するものであることを理解することができた。今後の解釈の基本線に据えたいと考えている。

(4) 今後の展望を述べる。

当初の計画どおりに進まない部分があった。たとえば『ニコマコス倫理学』第３巻の行為と選択の議論の解釈論文は今後の課題である。代わりに、上述の業績④があり、また、とくに業績②執筆中、現在までに提出した研究論文の延長上で、（プラトンの扱いも含む）意志の弱さの問題を解釈することが可能であるという自信が得られた。おおむね、計画の路線に沿った研究の進展があったと思う。

選択の理論、自然の目的に関する包括的解釈、さらに「目的因」の諸問題、および意志の弱さの問題のソクラテスからアリストテレスに至る問題史の叙述が、今後の関連課題である。本計画の遂行の直接の発展上でこれらに関しても成果を上げうると信じている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

① Kunio WATANABE, ‘The Concept of Chance and the Possibility of Aristotelian Teleology’, 『行為主体性と合理性の高レベル統合の研究　平成19年度～21年度』科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書（研究課題番号19520010）、査読無、2010年3月、pp.75-101.
② 渡辺邦夫、「ヴラストス「論駁法」再検討」、同、査読無、2010年3月、103-128頁。
③ 渡辺邦夫、「フィリア論の文脈」、大畠一芳（代表）、『平成21年度　茨城大学人文学部共同研究ユニット報告書「文学史・文化史・思想史における愛』、査読無、2010年3月、19-35頁。
④ 渡辺邦夫、「いくつかの哲学問題への「アレテー（徳）の適切性に関する一考察」、茨城大学人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』7 号、査読無、2009年9月、155-180頁。
⑤ 渡辺邦夫、「フィリア論序説――なぜ人は友を、また愛を必要とするのか？」、大畠一芳（代表）、『平成20年度　茨城大学人文学部共同研究ユニット報告書「文学史・文化史・思想史における愛』、査読無、2009年3月、63-76頁。
⑥ 渡辺邦夫、「アテナイの法廷とソクラテス」、茨城大学人文学部紀要『社会科学論集』46号、査読無、2008年9月、42-56頁。
⑦ 渡辺邦夫、「偶運の自然誌」、茨城大学人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』3号、査読無、2007年9月、103-126頁。
⑧ 渡辺邦夫、『アリストテレスにおける理性と自己知』、日本ヘーゲル学会編『ヘーゲル哲学研究』13 号、査読有、2007 年 12 月、149-158頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
渡辺　邦夫（KUNIO WATANABE）
茨城大学・人文学部・教授
研究者番号：30191753